

特集

関空を夕方出発し、赤道をこえニュージーランドに午前9時30分やつと着く。やはり遠い機窓から見た景色、思っていたとおり、みわたす限りの牧草、羊の群がみえてきた。空港に降りたら、心なしか人々もゆったりとしている気がする。ガイドさんの話では、スロリー、ゆったり、にっこりだそうです。郊外を走ると、緑は多く、平屋建の家々はイギリス風で花を愛し個性ある庭づくりは見事、人々は親切で日本人に友好的。以前は輸出入もヨーロッパでしたが今は日本・アジア・アメリカと友好関係が広がっている。又観光に力を入れているとのこと。そのため後に訪問したポリテック（技術専門学校）日本語学科が人気だそうです。ホテルや街の店でも上手な日本語がとびかう、少々びっくり。外国の人がきれいな日本語を使ってくれれば日本を理解してくれるそんな気持ちでとてもうれしい。私の感動の1つ特に美しい街に出会った。美しい街というのはこんなにも旅人の心をなごませるものかと実感した。それはクライストチャーチで人口32万人、ガーデンシティーとも言われ世界で10番目に入るとか、納得。その市の女性議員さんに逢う。環境保護に取り組んでいるとのこと。「まちのクリーン活動」リサイクル等の仕事をしている。公共の場所・市が雇って掃除はしているが、子供も大人も落ちているゴミは拾う。環境問題を子供の時から授業として教えていくとのこと。環境について考えさせられた。オーストラリアの、女性問題について、女性のための委員会も100年目に入った。100年前は資産を持つ権利もなかったが皆で結合していくことが大事。現在80のグループが連携を取り、社会的に大事な組織と認められた。取組に興味、技術を持ち、国や社会に対してしっかりしゃべることが出来るのが大事とのことでした。まさに女性のエンパワーメントだと思った。高齢者問題も日本と同じ課題があり政府も働いている間にお金をプールしていく保険制度も考えているとのこと。基本的には年をとっていくことで差別をうけない。社会としてどうお年寄りを助けていけるか、公的なサービスを社会が行うことによって、人々の目がかわっていくことをのぞむとの話でした。私達も地域でどうぬくもりのあるネットワークをはつていけるか取組んでいるところです。（田野 照子）

そこはニュージーランド、広い広い緑の草原、空は青く太陽はさんさんと輝き、さわやかな風が頬をなでる。そんな中を私は一人で悠然と馬にまたがり闊歩する。夢のようなほんとの話。生まれてはじめての体験でした。「この馬、英語でないと聞くこと聞かないのとちがう？」なんてわいわい言いながらも、「止まってー」「そっち行っちゃだめー」など結構しっかりわかってくれたみたい。そう言えば退職村のジューティさんも、いかげんな英語でも何やら気持ちがわかりあえたらしく帰りにはかたい握手をして、涙を流してくれました。これに勢い付いて、やたらと「サンキュー」「アイムソオリー」なんて連発していたら「とんでもございません」で返事をされて「日本語も国際語だね」と感激したり……。

まさしく珍道中だったけれど、見るもの、聞くもの新しい発見ばかりでとても意義ある13日間でした。「百聞は一見に如かず」参加させていただいたことに感謝しています。

（杉浦 英子）

— 同窓会への感想文

見知らぬ国へ想いを寄せて事前研修から回を重ねることで不安と期待が堂々巡り…。ついに初夏の花が咲き乱れ緑なすニュージーランド・オーストラリアにやって来ました。

両国に於いて女性関係機関施設視察、懇談交流等の国際交流でメモ書した用紙を見るにつけ盛り沢山の研修内容が何う程に感心しております。良き体験学習の場であったことと、参加メンバーの友好の輪も広がり、有意義な楽しい思い出深いものとなっております。句でもって旅つれづれでしょうか……。

冬に発つ旅の目指しぬ夏の国
手土産は桜花風呂敷夏に訪ふ
茫洋と羊群れみて夏つづく
夏クルーズオペラハウスの金州城
南極の旅は白夜のクリスマス
振り仰ぐ南十字の星涼し
鼻合わすマオリの挨拶涙匂ふ

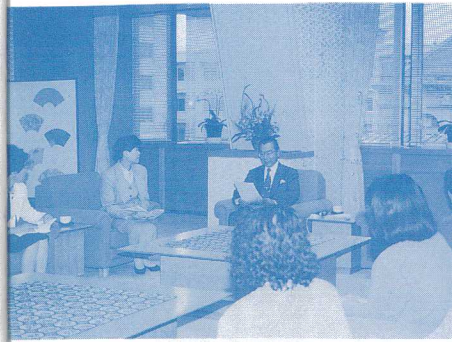
皆々様の御支援に大変感謝申し上げます。

（一瀬 裕子）

プリズベン・コアラ保護区にて



出発あいさつ



この13日間で一番関心のあったのはガイドさんだった。何人かがついてくれたが、この人たちのパワーには驚いた。海外で働く日本人を初めて見たからかもしれないが、日本という国を見直す気になったし、外国人女性をのびのびと働かすニュージーランドとオーストラリアに感心もした。これ等の人たちは、ただの観光案内ではない所もよく研究してきていた。ガイドさんが自分の言葉で話す時が一番興味深かった。ことに一番目のホソイさんは、前の日にちょっと自分が口をすべらせたことも次の日に勉強してきて、自分の言葉で話してくれた。離婚率が高いが子供の方はやはり悩んでいること。しかし事実は事実としてテレビのコマーシャルにも「明日僕はお父さんの家へ行って青いパジャマで寝ます」等とあることを話してくれたり、この国が多民族故の一つの言葉でも何通りも話すと教えてくれたり、海外の金持ちが特にアジア人が高い住宅を買うので住宅の値段がぐんぐん上がるとかこんなことで自分がアジア人で辛いこともあるとか。こういう何気ない話が私にはとても参考になった。（岡本カヨ子）

13日間のオーストラリア・ニュージーランド研修は見るもの、聞くもの、食べるもの、すべてすばらしい一言でした。

特に研修の中で団員の皆さんとの交流は、とても心に残っております。3回の事前研修で知り合った方々なのに、古くからの友人のような親交を結ぶことができました。福祉や女性問題と、考えや目的を同じくしている者同志のこまやかな心配りから自然に生まれすばらしい雰囲気の中で、充実した研修を体験できたことに心から感謝しております。

また、他国の様子を知り、日本との違いを知ることはとてもよい勉強になりました。

あらためて、これからの福祉の在り方、女性としての生き方など考えさせられた次第です。

（長西 養子）

期待と不安で一杯の海外研修、国外に出たことのない私は、出発の日が近づくにつれ、緊張感が増してきた。しかし、案するより産むが易い、という言葉のとおり、広大な牧草地で、のんびりと草を食べている牛、馬、ひつじ達、各家々には、季節がいつなのかと思う位、四季の花が咲き乱れ、マウントイーデンから見た景色は、まるでおとぎの国の様で、食物もよし、帰りたくなくなると聞いていた通りである。いろんな施設を訪問研修し、毎日農業に従事している私には、福祉についても、何の知識もなく、自分が、はずかしかった。研修を機に少しでも福祉について、知識を得ようと努力せねばと思った。そして、我々農家の後継者が、増えてくる様に、楽しくもうかる農業にせねばと思いました。どの施設どの分野においても、悩みは皆同じであると感じました。本当に楽しく、意義のある研修でした。ありがとうございました。

（森本 節子）

— 緑に魅せられた私

始まりはオークランドにあるマウント・イーデンであった。すでにあの緑が両側に目前にと広がっている。この地に立つのは昨年に続いて2度目である。だからあの緑がつかぬのである。この小山に立つと誰でも平等にこの街の全景を一望することが出来る。放牧されているので身が絞まりおいしいと言われるオーギービーフの素が群をなし、まとまっているようで孤独を楽しんでいるようにも見える顔つきでその巨体を転がしている。側を通り緑のじゅうたんを歩くとすぐ、ぐにやと柔らかい感触が靴底から伝わる。これには誰もが泣かされる。火山国でもある。噴火口が転がり込んできて私もには関わりのないこと二度と地上に戻れないかも知れないよと言わんばかりに大口を開けて座っている。なるい丘陵の下には高いビルと湾のブルーがうまく調和して都会的。反対側には赤と白の目立つ住宅がパセリの緑にサンドウィッチされて広がっている。同じ方向にマオリ族の記念樹であるワン・シリル・ヒルの丘が見える。自然との調和。主役はいつも緑である。

この国にいる間、丸々とした茶だんごや濃淡の緑の大木が迎えてくれると思うと心が弾む。クライストチャーチを流れるエイボン川の柳の大木の緑、それに続いて広がるハグレイ公園のゴミ一つない緑のカーペット、どこまでも続くので迷子になりそう。ポケてもこの緑だけは覚えていそうな気がする。絵心のない私は色で表現することも言葉で語ることも出来ないけれど、ニュージーランドの柔らかい緑とオーストラリアの少々硬い感じの野性的な緑、自然発火（ブッシュファイアー）で黒く焼けた木をおおい隠す強さを持った緑。ニュージーランドの緑とひと味違った色をしている。

今回の海外研修で見て体感したことは、緑の中で生活する人々の暮らしでもあった気がする。すっかり緑の虜になってしまった私である。緑は未熟・若輩の意とある。経験を一つずつ増やして年を取りたいと思う。

（山下よし子）

フィッツロイ・ガーデンにて

